

# 本太中だより

第2号

さいたま市立本太中学校

048(886)4305

<http://motobuto-j.saitama-city.ed.jp>

E-mail motobuto-j@saitama-city.ed.jp

令和8年4月30日

## よい音を奏でる

### 一人ひとりの音が、ウェルビーイングにつながる時

校長 田中 一秀

校内の木々は日ごとに緑を濃くし、爽やかな薫風が吹き抜けています。新年度が始まって三週間。新しいクラス、新しいなかま、新しい先生との出会いの中で、生徒たちは毎日を過ごしています。私たち教職員もまた、この新たな出会いに感謝しながら、日々の教育活動に取り組んでいます。

さて、三月末に、吹奏楽部のスプリングコンサートが行われました。体育館に用意した椅子では座りきれないほど多くの方々が集まり、会場は熱気に包まれていました。私は演奏を聴き、その素晴らしさに感動するとともに、部員たちの姿をととても頼もしく感じました。また、生徒のために日々丁寧に指導してくださっている顧問の先生、部活動指導員の先生、熱心に応援してくださっている保護者の方々に、心から感謝の気持ちを抱きました。

吹奏楽部の生徒には、それぞれ受け持ちの楽器があります。日頃の練習では、演奏力を高めるため、楽器ごと、パートごとに分かれて練習を行います。その時間は、自分の楽器に向き合い、自分の音を磨く大切な時間です。

しかし、実際の演奏では、トランペット、ユーフォニアム、トロンボーン、フルート、クラリネット、マリンバ——さまざまな楽器が同時に音を奏でます。そして、演奏を聴く私たちは、一つひとつの楽器の音というよりも、全体として響く「音楽」に心を動かされます。音色も役割も異なりますが、どれ一つ欠けても、あの豊かなハーモニーは生まれません。

学校も、この吹奏楽部の演奏によく似ていると私は思います。学校や学級には、一人ひとり異なる個性をもった生徒がいます。前に立って引っ張る人、周囲をよく見て支える人、静かに自分の役割を果たす人もいます。職員室も同じです。担当や立場、得意とする分野は違っても、それぞれが自分の役割を果たすことで、学校という一つの「演奏」が成り立っています。

もし、吹奏楽部の演奏会から特定の楽器が一つ欠けてしまったとしても、音楽は続くかもしれません。しかし、どこか物足りず、本来あるはずの深みや広がりや失われてしまいます。それは学校も同じです。誰か一人が欠けてもよい、入れ替わっても同じ音が出る、ということはありません。一人ひとりが、その人だからこそ出せる音を持っています。だからこそ、みんな全員が、学校に必要な存在なのです。

大切なのは、すべての音を同じにすることではありません。強い音も、やわらかな音も、速いリズムも、ゆったりしたテンポも、それぞれが認められ、響き合ったときに、はじめて「よい音」になります。周囲の音をよく聴きながら、自分の音を奏でる。その積み重ねが、学級や学校のハーモニーをつくっていくのだと思います。

本校が目指しているのは、誰かだけが目立つ学校でも、すべてを揃える学校でもありません。一人ひとりの違いが尊重され、それぞれの良さが生かされながら、全体として温かく、力強い音が響く学校です。これからも、生徒、教職員、保護者、地域の皆様、同じ楽譜を見つめ、それぞれの立場で音を奏でながら、本太中にしか出せない素敵なハーモニーを育てていきたいと思っています。